スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第３報）
―２年間のコスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果―
A Study Regarding the Fostering of Global Human Resources through Sports (Report No. 3): Outcome of Baseball Volunteer Activities in the Republic of Costa Rica over a Two-Year Period

宮﨑　光次[※1]

キーワード：　野球指導，コスタリカ，グローバル人材，JICA，国際貢献

要約

2017 年２月７日から３月６日までの１ヶ月間，本学野球部員 11 名がコスタリカ共和国（以下，コスタリカとする）に派遣され，野球の普及・振興に関わるボランティア活動を行った．

2016 年の第１回活動では，延べ 1,222 名に対して野球指導を行い，技術と共に礼儀や感謝の気持ちを持つことなどを伝えた．2017 年は，小学校体育教員対象の野球セミナー，小学校における体育授業，および，少年野球チームでの指導等を通して，小学生から大人まで延べ 1,630 名に対して指導を行い大きな成果を上げた．特に，コスタリカ人教員自らが小学生に野球指導を出来るようにするというチャレンジは,大きな一歩を踏み出した．

また，参加学生へのアンケート調査を実施，外国への興味関心，ボランティア活動に対する意識，語学学習へのモチベーションが高まったことが明らかになった．さらに，対人関係，部活動を含む大学生活，進路選択にも大きく影響していることが分かった．この活動は，国際貢献,「学而事人（がくじじじん）」（学びて人に仕える）の実践，グローバル人材育成のために大いに役立っていると考えられる．

1. はじめに

「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第１報）－コスタリカ共和国における野球指導－」[1)] で伝えた通り，桜美林大学は，独立行政法人国際協力機構（通称 JICA，以下 JICA とする）と連携ボランティア派遣事業実施で合意し，2016 年から 2020 年の５年間，毎年１ヶ月程度，野球部員 10 ～ 15 名をコスタリカに派遣し，野球の普及・振興に貢献するとともに，ボランティア経験を通じてグローバル人材の育成を図ることとなった．

本研究の目的は，コスタリカ国内で行った第１回活動（2016 年２月から１ヶ月間）で

※1 MIYAZAKI, Mitsuji　桜美林大学総合科学系

得た成果と課題を紹介すること，その課題を踏まえて行った第２回活動（2017 年２月から１ヶ月間）を紹介すること，および，参加した学生へのアンケート調査を通し，学生の変化を考察し，グローバル人材の育成に繋がっているかを検証することである．

2. 第１回活動の成果と見えてきた課題

第１回活動として，2016 年２月４日から３月４日の１ヶ月間，野球部員９名および筆者がコスタリカに派遣された．この活動の目的は主に以下の３点である．

1）野球を通じたコスタリカ青少年の健全な育成

2）コスタリカの野球競技力向上

3）コスタリカにおける野球競技者の底辺拡大

本学学生は，野球協会に所属する選手を対象とした野球教室，小学校における野球教室，体育教員養成大学での野球講習会，および，コスタリカ代表チームとの試合を通して，小学生から大人まで延べ 1,222 名に対して野球指導を行い，技術と共に礼儀や感謝の気持ちも持つことなどを伝え，大きな成果を上げた[2)]．

しかしながら，課題もいくつか見つかった．第１に，用具不足である．少年野球チームや協会などがグローブ，バット，ボールなどを所有し，練習のたびに貸し出すことを行っているが，個人の用具を持っている子どもは少数である．また，小学校にも用意されておらず，授業を行うことも難しい．日本より寄贈したグローブ，ボールなどを使用し，授業を行ったが，各校に配置するには到底足りず，用具の確保が急務であることが分かった．

第２に，グラウンドの環境，特に表面の状態が悪いことである．グラウンド整備をするという習慣が定着していないため，表面がデコボコでイレギュラーバウンドが頻繁に起こる．怪我防止やより高度なプレーをするためにもグラウンドの整備が必要である．

第３に，競技人口の拡大である．直接，本学学生が小学校を訪れ，子ども達に指導しても対象は限られている．また，一度きりの指導では，野球の魅力，本当の楽しさを伝えることまでは到達できない．さらに，コスタリカの子ども達だけで自発的に野球を実施するというところまでは到底至らず，野球競技人口の大幅な拡大は見込めない．そこで，競技人口拡大のためには，コスタリカ人教員がカギになると考えた．

3. 課題を踏まえての第２回活動

「魚を与えるのではなく，魚の釣り方を教えよ」と言う言葉は，教育の世界でよく出てくる言葉の一つである．中国語では『授人以魚　不如授人以漁』と言われ，「人に魚を与えると１日で食べてしまう．しかし人に釣りを教えれば生涯食べていく事が出来る」と言う意味で使われる．国際貢献事業でも同様のことが言えると思う．

第１回活動で明らかになった，用具不足，環境整備，競技人口拡大という課題を，こ

の観点から見直すべく，第２回活動では，「野球の用具を与えるのではなく，用具の作り方を教える」,「野球の技術を教えるのではなく，野球の指導法を教える」をテーマとした．これらを行うことにより，野球競技人口の拡大，野球の普及･振興が図れるものと考えた．

(1) 用具を与えるのではなく，用具の作り方を教える

サントドミンゴ野球協会関係者とともに「手作りバット」,「手作りＴ台」,「グラウンド整備用具トンボ（以下，トンボとする）」を作成した．材料はすべてコスタリカ国内で簡単に入手できるものである．これらを利用し，小学校における野球授業を展開した．

①手作りバット

打撃部分はスポンジ(配管に巻く筒状のスポンジ)を利用した.握る部分は塩ビパイプ(市販されている箒の柄）を使用し，スポンジと塩ビパイプはビニールテープを何重にも巻き固定した（写真 1).

写真 1．手作りバット作成風景

写真 2．手作りＴ台を利用しての打撃練習

②手作りＴ台

台座部分は大きなサイズのペットボトルを利用，その上にボールを置く部分としてスポンジ（配管を巻く筒状のスポンジ）を乗せ，ビニールテープで固定した（写真 2).

③トンボ

木材，ネジ，金属製アングルを用いてトンボを作成した．日本から持参した設計図を基に，木材をカットし，組み立てた（写真 3).

写真 3.　トンボ作成風景

写真 4.　用具の手入れ方法の指導

(2) 用具を与えるのではなく，用具の手入れ方法を教える

グローブ，スパイクをはじめ用具は，メインテナンスをしないと直ぐに摩耗，破損してしまう．用具不足の中，用具を大切にし，少しでも長持ちさせるとともに，愛情を注ぐことにより，自分の手足のように自在に扱えるようになることを伝えた（写真 4）．

(3) グラウンド整備をするのではなく，グラウンド整備の方法を教える

完成したトンボ（写真 5）を利用し，グラウンド整備の行い，重要性や整備方法を伝えた（写真 6）．

写真 5.　完成したトンボ

写真 6.　トンボの扱い方とグラウンド整備方法の指導

(4) 野球の技術を教えるのではなく，野球の指導法を教える

① JICA 中南米ベースボール型授業促進セミナー（以下，セミナーとする）

2017 年 2 月 13 日から 2 月 16 日の 4 日間，セミナーを実施した[3]．参加者は，黒田次郎氏（近畿大学准教授・JICA 野球技術顧問），三田部勇氏（筑波大学准教授・体育科教

育分野），加藤直樹氏（ジャイアンツアカデミーコーチ），中南米７ヶ国（アルゼンチン，エクアドル，エルサルバドル，コロンビア，ニカラグア，ベリーズ，コスタリカ）の長期隊員，及び，そのカウンターパート、コスタリカ教育省関係者，コスタリカ国内 27 地域の教育事務所関係者（地域の学校教育に関わる責任者），野球連盟関係者，コスタリカ人教員，JICA 関係者，本学学生 11 名，筆者である．

セミナー第１日は，三田部筑波大学准教授による講演が行われた．日本の学校体育についての紹介であり，具体的なカリキュラム，年間計画，ベースボール型授業の指導案などが示された．

セミナー第２日午前は，ジャイアンツアカデミー加藤直樹氏より，ベースボール型授業の講義および実技指導が行われた．2015 年に日本野球機構（NPB）が制作した指導用教本「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」（写真７左）[4] をスペイン語に翻訳した「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」（写真７右）[5] を作成し，テキストとして用いた．

セミナー第２日午後は，グラウンドで，「ゲーム」についての実技指導が行われた．その後，生徒も参加し，コスタリカ人教員が「バックホームゲーム（バット）」を実際の授業を想定し行った．

セミナー第３日は，教員，教育事務所関係者，本学学生が３人一組となり授業を担当し，教員が前日までのセミナーで学習した内容を生徒に対して実際に行った．不足がある場合には，本学学生がフォローした．また，教育事務所関係者は，授業を見ながら教員の教授法に関する評価を行った（写真８）．

セミナー第４日は，前日行われたベースボール型授業実施後のミーティングを行い，意見交換及び改善点の共有に努めた．

セミナーには，延べ 327 名のコスタリカ人教員が参加した．

写真７．指導用教本

写真８．コスタリカ人教員による指導

②コスタリカ人教員と共に小学校体育授業

セミナー終了後，本学学生は約３週間にわたり，各地の小学校を訪問し，ベースボール型授業を実施した．

この授業では，セミナーの際に用いた「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」の単元計画案に基づき，指導案を作成，準備運動・ドリル，バックホームゲーム（バット），整理体操と展開し，497 名の小学生に対し，コスタリカ人教員と共に指導した．

これらの活動を通し，2017 年は小学生から大人まで延べ 1,630 名に野球指導を行い，野球の普及・振興に大きく貢献した．

4. グローバル人材の育成

第 1 回活動における 1 ヶ月の活動を通して学生は大いに成長した．さらに，第 1 回活動の成果・課題を踏まえ，準備し臨んだ，第 2 回活動では更に変化があった．ここでは 2 年間の活動を通し，学生の成長を考察するとともに，グローバル人材の育成の成果を検証する．

(1) 活動に参加した学生数と大学院進学

2 回の活動に参加した学生は延べ 20 名である（表 1）．

このうち 3 名が第 1 回活動，第 2 回活動の両方に参加した．3 名はいずれも大学院に進学し，うち 2 名は，スポーツ国際開発学を専攻している．さらに，2016 年に 4 年生として参加した 1 名も大学院に進学した．

大学院進学した 4 名のうち 3 名は，2017 年に外部資金を得て，短期間ではあるが，国外にて研究調査を実施している．これは，本活動を通して，語学の重要性を認識し，語学力を向上させ，異文化への理解も進んだことから，外国に出ることへの敷居が下がった証であろう．

表 1　活動に参加した学生数

	第 1 回活動（2016 年）	第 2 回活動（2017 年）
4 年生	1	3
3 年生	8	2
2 年生	0	6
合計	9	11

(2) 参加学生の意識調査

第 2 回活動に参加した 11 名に対し，活動に参加し，どのような影響を受けたかについて，7 項目のアンケート調査を実施した．記述式とし，できるだけ具体的に回答するよう依頼した．

設問，および，回答は以下の通りである．

①外国に興味を持ちましたか？

- 野球を通して，コスタリカの方々と積極的に協力して活動を行うことができた．グローバル化が進んでいる現在，何かの形で日本以外の国の人々と関わりを持ちたいと思っており，今回の活動で更に興味を持った．
- 日本で生活しているだけでは気づくことのできないことに気づき，新たな発見が多々あった．コスタリカ以外の国にも行き，コスタリカや日本との比較をしてみたい．
- 英語圏の国に滞在したことがあるため元々興味は高かったが，英語圏以外の国に対する興味も大きく高まった．
- 外国への興味がより一層増した．学生時代に途上国でボランティア活動を経験でき，外国への興味のみならず，途上国への支援や学術的アプローチにも興味を持った．
- 海外に行ったことがなく，何があるのか，どんな所なのかなどとても興味があった．行ってみて現地の人の温かさや，日本とは違う生活に触れ，ますます興味を持った．
- これまで以上に興味を持つようになった．特に中南米のニュースを気にするようになった．
- 日本とは大きく異なるスポーツ環境があった．サッカー大国で野球を知らない人がほとんどであり，子どもに野球ボールを渡せばみんな蹴り出す，そんな文化に驚いた．
- もともと観光が好きということで外国に興味をもっていた．しかし，ボランティア活動をして，深く人々，文化を知り，さらに興味を持った．
- 違った環境に身をおくことに魅力を感じるようになった．
- 初めての海外経験であったが，コスタリカに行き，他の国の文化にも触れてみたいと思った．

②ボランティア活動に興味を持ちましたか？

- 野球指導を通して相手の立場で物事を考え，互いに協力し合った．多くの方々に支えられ，ボランティアがあることを改めて感じた．興味が更に深まり，国際協力にも魅力を感じた．
- 一番印象に残っているのが現地の人の笑顔である．指導をした子どもたちが笑顔でお礼を言ってくれ，人の役に立っていると感じ，とても楽しかった．また，参加したい．
- 他人のために役立ちたいという思いが元々あり，野球でボランティアを経験でき，非常に有意義であった．今後も続けて行きたい．
- これまでは，ボランティアと聞くと、「地域清掃活動や身近なものに対する支援」，あるいは，「ある問題を解決するための一時的な支援」というイメージが強かった．しかし，JICA のような ODA ベースのボランティア活動において，自分の知識や経験を最大限に生かせる分野でのボランティアを経験することで，ボランティアに対する

イメージは大きく変化した．このような活動がボランティアする側（大学生）の成長にもつながること，続けていくことで「持続可能な活動」となり，現地の人々が自ら問題を解決するきっかけをつくることができることを知った．海外のみならず国内でのボランティア活動に対しても，多角的な視野でとらえることができるようになった．

- 野球の普及振興を支援するという目的で行ったが，帰ってきた時には多くの事を得ることができた．ボランティアは与えるだけでなく，それ以上のものを得られるということを知った．
- スポーツを通じたボランティアには関心を持つようになった．
- 帰国後，大学院へ進み，コスタリカの野球に触れたことは非常に貴重だと痛感した．ボランティア活動はもちろん，異国と母国（日本）を共に調査することによって，お互いに良い影響が出ると実感した．ボランティア活動は現地を訪れ，触れ合うのみならず、Facebook など SNS を通じて，学習支援やコミュニティ形成など多様に変化しており，日々継続していきたい．
- ボランティアをしたいと思っていたが，1 歩が踏み出せない状態だった．今回の活動がきっかけでボランティアを行うことができ，さらに海外でできたことがとても良い機会となった．
- ボランティアの重要性を感じ，様々な活動に参加したいと考えるようになった．
- 私自身がやってきた野球の経験を活かせる場所であった．また野球などを教えて広めていく活動があれば参加したい．

③語学に興味を持ちましたか？

- 元々英語を勉強しており興味があった．
- スペイン語でのコミュニケーションが上手くとれなかったので，事前にもっと勉強をしておくべきだと感じた．語学の習得はグローバル人材の育成につながると思うので勉強したい．
- 英語は勉強していたがスペイン語の面白さを感じ，多言語の学習をしてみたいと感じた．
- 語学はコミュニケーションの手段であり，お互いを理解し合うために必要不可欠である．お互いの母国語が異なり，また，英語圏ではない国での活動で、日本人とコスタリカ人が英語でコミュニケーションをとること，お互いの言語を知ろうとすることで，異文化交流・理解に繋げることができたと感じる．
- コスタリカでは英語とスペイン語を使った．その中で使えそうな単語を少しでも多く覚え，なんとか話していく形で会話した．相手も分かろうと努力してくれ，語学力が乏しい中でもコミュニケーションをとることができた．しかし，もっとコミュニケーションをとりたい，もっと知りたいという思いが大きく，語学についてもっと勉強したいと思った．

- コミュニケーションにおいて，語学は非常に重要であると思うようになった．
- 言葉を理解しなければ通じ合う事は出来ないと実感した．英語が理解できない子どもが多く，限られた手段はノンバーバルコミュニケーションであった．是非、語学をマスターしたい．
- 語学には興味がなかった．しかし，ボランティア活動を行い，その国の言語が話せないと言いたいことが伝わらないと感じ，語学を学ばなければいけないと強く感じた．
- 外国で言葉が通じない大変さを感じ，語学を学びたいと感じた．
- スペイン語は世界で一番多くの国で使われている言語だとわかり，スペイン語を学ぶことで世界が広がると思った．

④対人関係にどのように影響していますか？

- 最も成長したと感じる点は相手の立場で考えて行動するようになったことである．活動中に，しっかりと相手の意見に耳を傾け，より良い活動にするために日々行動した結果であると思う．更に，自ら積極的にコミュニケーションを図るようになった．
- 海外でのコミュにケーションはとても難しく，言葉が通じないことに苦労した．しかし，言葉が通じなくても表情やジェスチャーで気持ちが通じたり，相手の言いたいことがなんとなく理解できたりすることがあった．聴く人の態度で，話す人の話し易さが変わるので，聴き方に注意するようになった．
- 派遣先で伝え方を意識して指導や生活をしてきた経験が，帰国後に相手の気持ちを考え，分かり易い伝え方をすることに繋がっている．
- 以前よりコミュニケーションがオープンになり，多くの人に気軽に話しかける事ができるようになった．どんな人にでも温かく挨拶したり，返事を返したりすることが実践できている．
- 今まで以上に人とフレンドリーに接するようになった．
- 積極的にコミュニケーションを取るようになった．
- 言葉がなかなか通じないときは，相手の言葉をいつも以上に集中して聴いていた．帰国後は，以前より相手の話をよく聴いて会話するようになった．

⑤大学生活にどのように影響していますか？

- 経済を中心に勉強している．南北問題や格差についても勉強しており，実際に途上国での生活を経験したことで更に深く学びたいと思った．
- 帰国後，大学内で報告会を行った．海外やボランティア活動に興味を持ってもらい，参加者増員につなげ，活動そのものをより良いものにして行きたい．
- 留学生と交流することや，外国のニュースを普段から意識するようになった．
- 子ども教育に関わるゼミに所属しているが，海外の教育事情について実体験をもとに活動ができている．

- 海外スポーツ（特に野球）について関心を持ったので，外国のスポーツ情報を入手するよう心掛けている．
- 授業の中でも，海外情勢を世界と日本の関係性を踏まえながら考察するようになった．
- 外国に興味をもち語学の授業をとるようになった．
- スペイン語などの語学学習に対する関心が高まった．
- コスタリカ滞在中は，会話に積極的に参加するように心掛けた．それが授業内で行われるグループワークのときに活きている．

⑥部活動にどのように影響していますか？

- チームメイト同士で積極的にコミュニケーションをとるようになった．また，チームの一員としてより積極的に行動するようになった．
- 日本では，当たり前のように毎日練習ができるが，海外では野球をやりたくても自由にできない人もいるということが分かった．しっかりとしたグラウンドがあり，道具が揃い，指導者の方や審判の方もいて，練習や試合ができることに喜びを感じなければならないと思った．JICA ボランティアを経験し，野球に対する姿勢が変わった．
- 道具が満足にない派遣先でボランティアをした経験が，野球部の道具管理に対する意識へ繋がっている．
- 学生コーチとして，現地での野球指導の中で気づいたことを教える事ができている．特に，当たり前だと疎かにしていた基礎知識を再確認できたことが活かされている．
- 野球を当たり前にできる環境に感謝して取り組むようになった．道具を大切に扱うようになった．
- 違った視点を持ち野球に向き合うことができるようになった．日本は野球をする環境に恵まれていることを痛感した．
- コスタリカで学んだ，伝えるときの表現力，視野の広がりが，学生コーチとして活きている．

⑦今後の進路（進路選択）にどのように影響していますか？

- 今回のボランティア活動で，人間関係の大切さや日本の良さを改めて感じた．将来日本の良さを世界に広め世界の人々を豊かにしたいと考え，貿易関係の仕事に興味を持った．
- 保健体育教員を志望している．言葉が十分に通じない中で，「どうしたら理解してもらえるか」「どうすれば出来るようになるか」ということを考えるとても貴重な経験になった．
- 銀行へ就職するが，グローバルに活躍できる（海外で活動できる）部署で働きたいと考えている．
- 教員を目指している．ボランティアで経験した野球指導や授業指導が活かせると思う．

- 教師になって人のために働きたい，人と関わりたいとより一層思うようになった．
- 海外と繋がる仕事に目を向けるようになった．
- JICA 長期ボランティア隊員も進路の選択肢になった．
- 大学院に進学したい．そこで今回のボランティア活動で感じたこと，考えたことを活かし研究をしていきたい．

以上のように，アンケート調査の結果から，「外国人と接し，異文化に触れ，新たな気づき、発見があり，外国への興味はより一層増した」，「人の役に立っていると実感できただけでなく，ボランティアする側の成長にも大いに繋がることが分かった」，「語学はコミュニケーションツールとして，お互いを理解し合うために，必要不可欠であり，是非，マスターしたい」など外国への興味関心，ボランティア活動に対する意識，語学学習へのモチベーションが高まったことが分かる．

さらに，「積極的にコミュニケーションをとるようになった．聴き方に注意するようになり，分かり易い伝え方をするようになった．相手の立場で考え行動するようになった」，「海外情勢を世界と日本の関係性を踏まえながら考察できるようになった．留学生と積極的に交流するようになり，外国のニュース，スポーツ情報も普段から意識するようになった」，「日本の環境に感謝し，道具の管理，練習への取り組み方，野球に対する姿勢が変わった」，「国際社会で活躍できる人材になりたい，グローバルに活躍できる部署で働きたい，JICA 長期ボランティア隊員も進路として考えたい」など対人関係，部活動を含む大学生活，進路選択にも大きく影響していることが伺える．

5. おわりに

第 1 回活動では，1,222 名に対して野球指導を行い，技術と共に礼儀や感謝の気持ちも持つことなどを伝え，大きな成果を上げた．しかしながら，用具不足，球場環境の不備，競技人口拡大の難しさという課題が見つかった．

第 2 回活動では，「野球の用具を与えるのではなく，用具の作り方を教える」，「グラウンド整備をするのではなく，グラウンド整備の方法を教える」，「野球の技術を教えるのではなく，野球の指導法を教える」をテーマとし，コスタリカ人自らの手で，用具を作り，環境整備をし，野球の普及・振興を図れるよう試みた．そして，コスタリカ人教員のセミナー参加者をはじめ，小学生から大人まで合計 1,630 名に野球指導を行い，大きな成果を上げた．

また，参加学生も異文化の中に入り，試行錯誤しながら，多くの人と時間を過ごすことで，様々なことを学んだ．アンケート調査からも，外国への興味関心，ボランティア活動に対する意識，語学学習へのモチベーションが高まったことが明らかになった．さらに，対人関係，部活動を含む大学生活，進路選択にも大きく影響していることが分かった．

本活動は，スポーツによる国際貢献，「学而事人（がくじじじん）」（学びて人に仕える）の実践である．この活動を通して，グローバル人材の育成が着実に図られているものと考えられる．

引用・参考文献

1） 宮﨑光次「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第１報）－コスタリカ共和国における野球指導－」，桜美林論考『自然科学・総合科学研究』，第７号」，pp95-112，2016 年３月

2） 宮﨑光次「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第２報）－ 2016 年コスタリカ共和国における野球指導－」，桜美林論考『自然科学・総合科学研究』，第８号，pp37-50，2017 年３月

3） 宮﨑光次「コスタリカ共和国におけるベースボール型授業導入の試み」，桜美林論考『教職研究』，第２号，pp71-80，2017 年８月

4） 岡出美則他監修「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」，一般財団法人日本野球機構，2015 年

5） Yoshinori Okade，「Clase “Tipo Beisbol” Sencilla」，Nippon Professional Baseball Organization，2016 年